尿沈渣にて膀胱発生の悪性リンパ腫を疑った 1 例

◎鈴木 裕絵[1)]、戸枝 義博[1)]、上田 淳夫[1)]、関 昌世[1)]、末原 香子[1)]、池田 栞里[1)]、石黒 和也[1)]、中村 浩司[1)]
筑波メディカルセンター病院[1)]

【はじめに】尿沈渣検査にて認められる異型細胞の多くは尿路上皮癌などの上皮性悪性腫瘍由来が主体であり,リンパ腫の出現は稀である。今回我々は,尿沈渣にて膀胱発生の悪性リンパ腫を疑った 1 例を報告する。

【症例】70 歳代女性。7 年前,咳嗽や右背部痛を主訴に当院を受診。腹腔内リンパ節生検にて節性辺縁帯リンパ腫(NMZL,nodal marginal zone lymphoma)と診断され,他院血液内科で治療後,近医にて経過観察中であった。近医定期受診時に肉眼的血尿を認め,腹部超音波検査にて膀胱内腫瘤と左腎水腎症を認めた。精査・加療目的で当院泌尿器科を紹介受診。尿定性・沈渣,尿細胞診検査を施行した。CT にて膀胱後壁から子宮,骨盤壁にも達し,両側尿管を巻きこむ腫瘤を認めた。膀胱鏡にて三角部に粗大な腫瘤性病変を認め,TUR-Bt を施行した。

【尿検査所見】蛋白(-), 潜血(2+), 白血球反応(2+), 赤血球 1-4 /HPF, 白血球 5-9 /HPF, 異型細胞 10-19 /HPF(N/C 比は中～大,大きさは白血球よりやや大きい細胞で孤立散在性)

【異型細胞所見】既往歴から NMZL の転移再発を疑い,直ちに乾燥塗抹標本を作製,May-Giemsa 染色を施行し,血液部門担当者に鏡検を依頼した。N/C 比は 50～90%と様々で,核網繊細で核小体がやや目立つ,好塩基性の細胞質を有する中～大型の異型リンパ球様細胞を多数認めた。細胞診では,中型～やや大型のリンパ球様の異型細胞が多数認められた。核クロマチンは細顆粒状から顆粒状を呈し,核小体や核分裂像も散見され,悪性リンパ腫が考えられた。

【組織所見】核の大小不同やクロマチンの高度増加を呈する異型リンパ球の増生が認められ,濾胞構造はなく,高度の浸潤像で,筋層も含めて膀胱壁構造は不明であった。免疫組織学的には,B 細胞マーカー陽性,Ki-67(80%陽性)で,びまん性大細胞型 B 細胞性リンパ腫が考えられた。既往のリンパ節生検 NMZL と比較し細胞異型は高度で,phenotype も異なっていたが,NMZL からの Transform の可能性も考えられた。

【まとめ】本症例では,一般検査部門を起点に各検査部門の連携を行った。尿沈渣にて本症例の様に稀な異型細胞が疑われた場合は,総合的な判断を必要とする場合があると考える。

連絡先 029-851-3511(代表)